

【研究ノート】

‘Traduttore, traditore?’ ——思想史研究における誤訳について——

中 金 聡

目 次

はじめに

- 1 英訳は新訳にかぎる
- 2 たかが脱訳，されど脱訳
- 3 既訳を尊重したのが仇になり……
- 4 勘違いではすまない

おわりに

はじめに

かつてゲーテは『西東詩集』(*West-östlicher Divan*, 1819)に付した長文の注のなかで、詩の翻訳の発展にことよせて翻訳一般に三種を区別した。第一段階の「簡素な散文 (schlicht-prosaïsche)」型は、詩的陶醉を犠牲にしても異国の優れたものの香気を味わわせてくれるような翻訳で、ルターの俗語訳聖書がその代表である。第二段階の「翻案 (parodistische)」型は、異国人の精神を自国の精神によって再現しようとして、結局は異国の果実よりも自国の土地にできたその代用品を好んでいるような翻訳であり、当時の流行作家ヴィーラントの訳業はその典型であったという。第三段階は原典と「同位 (identisch)」の翻訳である。これがゲーテによると翻訳の「最高かつ最終的」な段階であるが、それには自国の特異性を多少なりとも抹消しなければならないため、国民の趣味が洗練されないとこの種の翻訳は受け入れられにくい⁽¹⁾。

これは翻訳がなぜ今日でも労多くして報われること少ない仕事なのかを説明してくれる。概して翻訳書の読者は、読んでわからないと翻訳のせいにして、自分がその書物を読む域に達していないからだとはけって考えないものだ。平易に訳せてあたりまえ、読みにくいと訳者に罵詈雑言を浴びせる。そんなわかりやすさ一辺倒の読者をわかった気にさせるのが、巷に跋扈する「超訳」と銘打ったまがいものである。そもそもむずかしい原著の文章を読者の知的レベルに合わせて改竄するのであるから、ゲーテなら「翻案」と呼び、それを歓迎する国民を文化的洗練度に劣るとみなすだろう。あたりまえのことだが、書物は読者を選ぶ。優れた翻訳書は読者層が成熟しているところにしか生まれない。

それにしても、原典と「同位」の翻訳とはどのようなものをいうのだろうか。仮にある言語に属する表現と完全に等価なものを別の言語で表現するような翻訳だとしたら、いかに秀でた翻訳者の職人芸をもってしてもそれは不可能である。ある言語における意味されるものは、それを意味する語の音調と解きがたく結びついており、その結合が醸し出す意味のあやは別の言語で絶対に再現できないのであるから、この翻訳観からは「翻訳とはすべて誤訳である」という陳腐な結論しか出てこないだろう。ゲーテ自身も原典と「同位」であるとはそういう意味ではなく、「異国のものと自国のもの、既知のものと未知のもの」とが環状につながっているような翻訳のことだと述べていた。

ベンヤミンは「翻訳者の課題」(“Die Aufgabe des Übersetzers,” 1923)で、「言語構築物の翻訳可能性 (Übersetzbarkeit) は、そのものが人間にとっては翻訳不可能である場合にも、依然として考慮にあたいする⁽²⁾」と主張している。翻訳の良し悪しは、原典を別の言語で再現する翻訳者の力量とは関係がない。むしろ原典がある言語で意味したものを十全に意味することができるような言語、伝達を目的としたたんなる記号になってしまう以前の、諸言語の表現可能性の総体を内包する「純粹言語 (die reinen Sprache)」にまで遡って、それとの関連で決まるのだ。ベンヤミンの翻訳観に立つなら、翻訳とは本質的に創造的な営為であって、原典への忠実さに縛られないばかりでなく、むしろ原典が書かれた言語を介して自国語の表現を拡張するのがよい翻訳であるとさえいえる。

この議論が聖書における啓示をもちだして締めくくられているように、西洋では翻訳というと神のことばを人間のことばに訳せるかどうかの問題として論じられることが多い。旧約聖書「創世記」のバベルの塔の物語を知らなくても、翻訳がわれわれの言語的境涯(人間の言語がかくもさまざまであること)と切っても切れない関係にあることは周知の事実である⁽³⁾。だが小論は同じ翻訳を論じて、それよりはるかに慎ましく卑近なことがらに話題を限定せざるをえない。すなわち、人間の営為であるかぎりでの翻訳に未来永劫つきまとう誤訳の問題である。

研究者にとって翻訳書は原著の代用品である。どうしても読みたい、読まなければならないテキストに邦訳があると、誰でもありがたいと思う。自分に読めない言語で書かれているテキストはもちろん、まがりなりにも読める言語で書かれたテキストの場合でも、原書で読む労を省いて時間の節約になるのは助かるはずだ。ただしわたしは、論文などに引用したい文章を訳書で見つけると、できるかぎり原典を参照し、自分で訳してみても邦訳に異存がなければそれで引用する、という手順を踏むことにしている。ひょっとしたら誤訳があるかもしれないという一抹の不安が拭えないのだ。そういう習慣ができたのは、思想史研究の過程で多くの先達の訳業に助けられながら、そこにいくつも誤訳があることに気づいたからである。それらがどうして生じたかはあまり重要ではない。畢竟、翻訳者も人間であるから、そして人間のすることにエラーはつきものだからとしかいいようがない。だが、少なくとも学術研究の一環として看過できない誤訳を発見したら、研究者にはそれを正す責務がある。過去15年ほどエピクロス主義研究に取り組むうちにわたしが邦訳書のなかに見つけた誤訳は、いずれも避けようと思えば避けられたテクニカルな誤りであった。以下でその一端を紹介し、自分の責務を果たすことにしよう。

1 英訳は新訳にかぎる

わたしはイタリア語を解さないので、マキアヴェッリやヴィーコの著作は邦

訳で読み、引用したい文章が見つかったら英訳を参照する。思想史研究では思想家間での哲学的トポスの継受関係の解明が要となるが、漢語に置き換えられてしまうとそれがどうしてもたどりにくくなるため、せめて同じアルファベットを使用する言語で読んで確認しておこうと安易に算段するのである。しかし古典作品ともなると、英訳書だけでも複数出版されていて、どの版で読むかで悩んでしまう。古くても優れた英訳はもちろんたくさんある。たとえばトゥキュディデスのホップズ訳だが、それをいまでも読むのはホップズ研究者くらいのもので、トゥキュディデスはホップズ訳にかぎるとするのは相当に偏屈な意見ではないだろうか⁽⁴⁾。わたしの経験では、新しいほど信頼できるという原則は英訳にこそあてはまる。マキアヴェッリ『ディスコルシ』(*Discorsi sopra la prima deca di Tito Livio*, 1531) の例で説明しよう。

マキアヴェッリはその第一巻でいわゆる歴史を「accidente の連鎖」と表現しており、英訳書の多くはこれに events の語をあててきた⁽⁵⁾ (ちなみに邦訳では「出来事」⁽⁶⁾)。だがマキアヴェッリが若き日にルクレティウスのラテン語長詩『事物の本性について』(*De rerum natura*) を全文手写し、その影響の痕跡を後年の著作に残していることが確認されている現在、accidente もルクレティウスの eventa のイタリア語訳であったという説が有力になっている。eventa なら events でよさそうなものだが、そう簡単な話ではない。ラテン語の eventum には元来「結果」という程度の意味しかないが⁽⁷⁾、ルクレティウスはそれをエピクロスの συμπτώματα の訳語として用いているからである。συμπτώματα はアリストテレスの形而上学に由来する用語で、同じ種に属する個物に共通してそなわる「属性 (συμβεβηκότα)」ではなく、われわれが見かけたその種に属する個物がたまたま帯びている性質 (エピクロスの説明では「われわれにあらわれてくるまさにそのとおりに物体に付随しているだけのもの」[DL.X.68-71]) を意味し、「偶有性」という訳語が定着している。ルクレティウスは「属性」を「特性 (coniuncta)」, 「偶有性」を「偶然事 (eventa)」とそれぞれ呼びかえ、こう説明した。

特性とは、致命的な解体なしにはそのものから取り去ることもたがいに引き離すこともできないもの、たとえば石にとっての重量、火にとっての熱、水にとっての流動性、すべての物体にとっての可触性、空虚にとっての不可触性のことである。これに反して、隷属、貧困、富裕、自由、戦争、協調、およびその他の、概してそれがやってきても過ぎ去っても本質が不変同一であるようなものを、ふつうわれわれは正しくも偶然事と呼ぶ [DRN.I.451-458]。

つまりマキアヴェッリが歴史を「accidenteの連鎖」と表現したのは、そのときどきの事物と人間の配置はたまたまそうになっているだけで合理的な理由があるわけではなく、それがまた相互に必然的な結びつきをもたずにひたすら継起していくにすぎない、といたいのである。この意味での歴史にもそのつど原因はもちろんあるのだが、人間にはその因果関係が逐一わからないために、歴史の進行が宿命のようにみえてしまう。だが事物と人間の配置がいまあるようなものでなければならぬ必然性はなく、別様の配置もありえたのだから、むしろすべては偶運と呼ぶべきなのだ。「運命 (fortuna) ⁽⁸⁾」が人間活動の半分を支配しても、残りの半分は人間の自由な意欲 (libero arbitrio) にもとづく「力 (virtù)」の支配に服するはずだというマキアヴェッリの周知の信念も、このような歴史理解が根底にある ⁽⁹⁾。そういう錯綜した思想史的背景をもつ accidente を、とくにその「偶然的・偶発的」というニュアンスを、英語の events や日本語の「出来事」は十分にあらわせない。マンスフィールドとタルコフの新訳『ディスコルシ』は、それだけのことを踏まえてイタリア語の accidente を happenings と英訳しているのである ⁽¹⁰⁾。

以上は厳密にいうと誤訳にはあたらないし、思想史研究者以外にはつまらないことに目くじらを立てているとしかみえないかもしれない。しかし、新訳『ディスコルシ』の登場後にマキアヴェッリにおける「エピキュリアン・モメント」研究が英語圏で活況を呈していることは事実なのだ ⁽¹¹⁾。デモクリトスの必然性やストア派の宿命の哲学に抗してエピクロスの提起した偶然性と自由の哲学は、ルネサンス期にいたってようやく陽の目をみた。ただの一語が誤

‘Traduttore, traditore?’ (中金)

しかた次第でその証拠に転じたわけである。

2 たかが脱訳、されど脱訳

原文の一部を訳し忘れる脱訳は、まちがいなく誤訳に数えられる。単語ひとつないと文意が変わってしまうような脱訳は研究者ならさすがにしないが、類似の単語がいくつも並んでいるとひとつをつい見落としてしまうことはよく起こる。その典型がフランシス・ベーコン『エッセイズ』(*Essayes*, 1597)の邦訳にあることは意外に知られていない。

ベーコンはその第二版で増補した「迷信について」という章で、エピクロス「メノイケウス宛の手紙」から「多くの人々の信じている神々を否認する人が不敬虔なのではなく、かえって、多くの人々のいだいている臆見を神々におしつける人が不敬虔なのである」[DL.X.123]を引用し、「プラトンでもこれ以上のことはいえなかった」と賛辞を惜しまない。エピクロスは神を否定するどころか、神の本性について実に敬虔な観念(「至高かつ至福なもの」)を抱懷していたのに、それが公認の宗教と異なるというだけで無神論者の汚名を着せられるには十分であったのだ。だがそもそも無神論は、神にふさわしくない意見で神を侮辱する迷信ほどタチの悪いものではないとベーコンはいう。岩波文庫の邦訳にはその文章に脱訳がある。

無神論は人間を常識、哲学、生まれつきの敬虔、評判に敵対させない。すべてこれらのものは、たとえ宗教が存在しなくても、外面的な道徳的徳性への手引きとなるだろう。ところが、迷信はこれらのものをすべて打ちこわして、人々の心の中に絶対君主制を建てる。それゆえ、無神論は決して国家を混乱させなかった。それは人々に行く末のことなど気かけずに、自分のことだけに用心深くさせるからである⁽¹²⁾。

Atheism leaves a man to sense, to philosophy, to natural piety, to laws, to

reputation; all which may be guides to an outward moral virtue, though religion were not; but superstition dismounts all these, and erecteth an absolute monarchy, in the minds of men. Therefore atheism did never perturb states; for it makes men wary of themselves, as looking no further⁽¹³⁾.

みてのとおり、邦訳では「法律」が抜けおちている（加えて1行目は文意がとおらない。「無神論は人間を常識，哲学，自然の敬虔さ，法律，評判の手にゆだねる」とでもすべきところだ）。この類のうっかりミスは、どんなに注意していても起こりうるものではあるのだが、いまはそれが思想史研究の観点からみるとかなり致命的で、情状酌量の余地のない誤訳になってしまうことを説明しよう。

この文章はきわめて引用頻度が高く、管見のかぎりでも17世紀の代表的な人文主義リベルタンであったラ・モット・ル・ヴァイエや、18世紀の唯物論者ドルバックをはじめ、後世の名だたる無神論者たちが自著に引いている⁽¹⁴⁾。詩人シェリーもこれに感銘を受けたひとりであった。大学在学中に公刊したパンフレット「無神論の必然性」(“The Necessity of Atheism,” 1811)に「〈神〉なるものの存在についての証拠がこのように不十分であると大衆に知らせたところで、社会になんの害もおよぼしません⁽¹⁵⁾」と記したとき、シェリーの念頭にはすでにこの一節があったのだろう。それが発禁処分を受け放校となったシェリーは、後年の長編詩『女王マブ』(*Queen Mab*, 1821)に付した「神は存在しない!」と題する長大な注として「無神論の必然性」を復活させ、そこにあらためてベーコン「迷信について」の件の一節を引用した⁽¹⁶⁾。

ベーコンの無神論擁護は、普遍的啓蒙によって迷信を完全に払拭したのちに「無神論者の社会」が到来することを期待する思想家たちに絶大な影響をあたえた。カルヴァン主義者のピエール・ベール、理神論者のヴォルテール、真正無神論者のラ・メトリは、宗教についての考えかたはまちまちでも、時代の正統信仰に叛旗を翻すという意味ではいずれもベーコン的無神論者であった⁽¹⁷⁾。かれらはベーコンのメッセージをこう理解したのである。「人間を現世で活動

‘Traduttore, traditore?’ (中金)

させる動機を、人間の想像力のうちにしか存在しない観念世界にもとめてはならない。この可視的世界のうちにこそ、人間に罪過を回避させ、徳へ駆りたてる原動力は見いだされる⁽¹⁸⁾」。神や死後への観念的恐怖を煽らずとも社会の道徳的秩序を維持することは可能だと信じる政治的無神論者たちが、「常識、哲学、自然の敬虔さ、評判」にもまして重視するのが「法律」、つまり遵法精神であった。だからこの思想の系譜をたどりたかったときに、発端となったベーコンの文章に肝心の「法律」の一語が見つからないのはとても不都合なことになってしまうのである。

3 既訳を尊重したのが仇になり……

前節に登場したバールの主著といえばもちろん『歴史批評辞典』(*Dictionnaire historique et critique*, 1696)であり、それを含む野沢協の個人訳バール著作集全8巻(1978-97年)は第34回日本翻訳文化賞を受賞した。17世紀までの思想上の重要な論点をほぼ網羅して、研究者にとっては無尽蔵の宝庫ともいえる『歴史批評辞典』だが、現代のいわゆる「読む」辞典とくらべてもかなり趣が異なっている。とくに興味ぶかいのは、きわめて特異なその体裁である。各項目の本文は簡素で当たり障りのない記述だが、そこにポイントを落とした注が多数付されている(邦訳では二段組み)。その分量は本文の数倍から数十倍におよび、本文ではあからさまに書きにくい政治的・哲学的・神学的に微妙な議論が展開されていて、そこが実に面白いのだ。注にはさらに傍注が付いており、主として引用出所を示すためのものだが、ときに注よりもきわどいコメントが記されている。この三段構えのレイアウトは、もちろん当時の教会による検閲や読者からの論難を避けるための工夫であり、その構造を忠実に再現したことも訳書の価値を高めている(それだけに注と傍注を一部割愛せざるをえなかったのは残念であった)。

そんな名訳もまぬがれなかった誤りは、やはり目を凝らして読まなければわからない注の部分にある。『歴史批評辞典』の「ルクレティウス」の項に付さ

れた注Sの末尾に、ベーコンも引用したエピクロス「メノイケウス宛の手紙」の一節[DL.X.123-24]が出てくる⁽¹⁹⁾。それもなぜかガッサンディ校閲のギリシア語原文とガッサンディのラテン語訳[A, 83=OOV, 46]を並記するという念の入れようである。

Ἀσεβῆς δὲ οὐχ ὁ τοὺς τῶν πολλῶν θεοὺς ἀναιρῶν, ἀλλ' ὁ τὰς τῶν πολλῶν δόξας θεοῖς προσάπτων. οὐ γὰρ προλήψεις εἰσὶν, ἀλλ' ὑπολήψεις ψευδεῖς αἱ τῶν πολλῶν ὑπὲρ θεῶν ἀποφάσεις: ἔνθεν αἱ μέγιστα βλάβαι τε τοῖς κακοῖς ἐκ θεῶν ἐπάγονται καὶ ὠφέλειαι τοῖς ἀγαθοῖς. ταῖς γὰρ ἰδίαις οἰκειούμενοι διὰ παντὸς ἀρεταῖς τοὺς ὁμοίους ἀποδέχονται, πᾶν τὸ μὴ τοιοῦτον ὡς ἀλλότριον νομίζοντες.

Impius est proinde, non is, qui *vulgareis* multitudinis Deos tollit; sed is, qui multitudinis opiniones Diis adhibet. Non enim germanæ prænotiones sunt, sed suspiciones falsæ, ea, quæ de Diis ab hominibus è vulgo traduntur. Arbitrantur quippe & malis detrimenta maxima, & bonis præfidia à Diis aduenire: siquidem propriis virtutibus, seu affectibus innutriti, simileis sui *Deos* admittunt, & quicquid affectuum suorum non est, id existimant ab ipsis alienum.

邦訳書の対応箇所は岩波文庫の出隆・岩崎允胤訳『エピクロス——教説と手紙』を利用している（実際にはフランス語の地の文と区別するためにギリシア語とラテン語の引用文はカタカナで表記してある）。

多くの人々の信じている神々を否認する人が不敬虔なのではなく、かえって、多くの人々のいだいている臆見を神々におしつける人が不敬虔なのである。というのは、多くの人々が神々について主張するところは、先取観念ではなくて、偽りの想定であって、それによると、悪人には、最大の禍いが、いや最大の利益さえもが、神々からふりかかるというのだからである⁽²⁰⁾。

結論からいえば、既訳を尊重する研究者の律儀さが裏目に出て誤訳になってしまった。ギリシア語原文とラテン語訳の末尾近くにみえる τοῖς ἀγαθοῖς; bonis (「善人には」) が邦訳では省かれているのである。この一節が伝存するエピクロスのテキストのなかでも最難読箇所であり、今日もなお論争の渦中にあることを訳者は知らなかったようだ。τοῖς ἀγαθοῖς がガッサンディの挿入した語句であることは、エピクロス主義研究者のあいだでは周知の事実である。これを挿入して読むと、「悪人には最大の禍いが、いや善人には最大の利益さえもが、神々からふりかかる」となって、エピクロスは悪人を罰し善人に報いる義の神の観念も「偽りの想定」に含めていたことになる。現代の校閲者たちはこの挿入を疑問視して、「悪人には最大の禍いが、いや〈生贄を捧げるなどして神々の愛顧をもとめれば〉最大の利益さえもが、神々からふりかかる」と読み、これを「偽りの想定」とみなすエピクロス自身は神の正義を否定していないと解釈する傾向にある⁽²¹⁾。出・岩崎訳はガッサンディ説に否定的な B・ファリントンの解釈に影響を受けているので、当然のことながら「善人には」がない。同じ岩波文庫でもディオゲネス・ラエルティオス『主要哲学者の生涯と意見』の加来彰俊による全訳版(野沢の訳業のあとに出版された)は、ガッサンディ説をとって「悪人どもには最大の害悪が、また善き人びとには最大の利益が、神々からもたらされる⁽²²⁾」と訳出している。

ガッサンディによるギリシア語本文批評はその後のディオゲネス・ラエルティオスのすべての刊本の基になったもので、それにもとづくラテン語訳も前世紀のトラヴェルサーリ訳にくらべて格段に正確である。後世の模範となったその厳密さは、とくにインターテクスチュアルな整合性へのこだわりによる。エピクロスは神々の存在を否定するという意味での戦闘的無神論者ではなかった。神々は「不死かつ至福」であるがゆえに、「それ自体に煩いをもたず他のものにあたえもしない。したがって怒りや愛顧によって動揺させられることもない。そのようなことはすべて弱者にのみ属することであるのだから」[KD.1=DL.X.139] というのである。この無関心な神というイメージは、直接には摂理をもって森羅万象に介入するストア派の「おせっかいな神」を批判した

ものだが、のちにニーチェがキリスト教的な神の批判にもちだしたことで知られる。

神々にかんしてもっとも尊ぶべき想念をもっていたのは、エピクロス主義者たちである。つまり、絶対的なものがどうして絶対的ならざるものとなんらかのかかわりをもちうるというのか？ 前者はどうして後者の原因や掟や正義であり、また後者にたいする愛や摂理でありうるのか！〈神々が存在するとしたら、その神々はわれわれのことを氣にとめていない〉——これこそあらゆる宗教哲学のなかで唯一正しい命題である⁽²³⁾。

人間の祈りに応える神とはなんと都合のよい神か、それこそ不敬虔ではないか。神は完全至高の存在であるからこそ、むしろ人間のすることなすことに無関心であるはずだ。エピクロスの神概念が異教的でありながらもこのうえなく敬神的であることを見てとったガッサンディは、件の文章はくりかえし手写される過程でキリスト教的な先入見のもとにもともとあった τοῖς ἀγαθοῖς が脱落してしまったのだと推理して、これを復元したのである。ベールはこの文章を、エピクロスは神の摂理をみとめていたというある論者の主張を論駁するために引用している。カトリック信者が大半を占めるフランスで少数派のカルヴァン主義者であったベールは、ガッサンディのエピクロス解釈に信仰の多元性と宗教的寛容を擁護する強力な論拠を見いだしたのだろう。

ガッサンディの影響とおぼしきものはこれだけではない。同じ『歴史批評辞典』の「エピクロス」の項を執筆するにあたり、ベールはガッサンディの『エピクロスの生涯と流儀』(*Vita et Moribus Epicuri*, 1647) とジャック・デュ・ロンデルが 1693 年に刊行した同名書を主たる典拠にしている。ロンデルによればエピクロスは神の摂理を否定していないと本文に記したベールは、しかし注 L でその信憑性を疑問視するようなきわめてアイロニカルな説明を展開したうえに、傍注でセダン大学の同僚であったこの修辞学者の著作について、同じ著者の『エピクロスの生涯』(*La vie d'Epicure*, 1679) にガッサンディを剽窃した

‘Traduttore, traditore?’ (中金)

「まぎらわしい題」をつけたただけだと酷評する⁽²⁴⁾。これは誤訳の問題を論じるための布石にもなっている。ベールは注 N でデイオゲネス・ラエルティオスの τῆς μὲν γὰρ πρὸς θεοὺς ὁσιότητος καὶ πρὸς πατρίδα φιλίας ἀλεκτος ἡ διάθεσις [DL. X.10] という一節を取りあげて、それをエピクロスの敬神と祖国愛は真摯なものであると読む通説は誤解であり、「実際かれは、神々への敬虔の念と祖国への愛を口ではいえないほど内に宿していた (Nam sanctitatis quidem in Deos, & charitatis in Patriam suit in eo affectus ineffabilis)」[A, 15=OOV, 4] という——結果として時代の正統信仰と世俗的な愛国心とを同列において相対化する——ガッサンディの訳が正しいと断言するのである⁽²⁵⁾。

こうしてエピクロスからの引用に「善人には」があるとないとでは、ベールの思想の解釈にも雲泥の差が生じる。たしかに第一次的な研究対象にでもしていなければ、これがそもそも信憑性を問われているテキストであることなど思ってもよらないだろう。だが既訳を鵜呑みにせず、ギリシア語なりラテン語なりをまず自分で訳していたなら、この誤りは避けられたはずなのである。『歴史批評辞典』はエピクロス主義の受容史という文脈にかぎらず、近世思想史上の最重要文献のひとつでもあるだけに、あえて苦言を呈したい。

4 勘違いではすまない

直接の研究対象となる一次文献はかならず原語で読まねばならないが、二次的参考文献は邦訳があればそれで読むに越したことはない。それが畑違いの専門書ともなれば、日本語で読めるだけでもありがたいことである。ただし、自分の専門分野の書物なら邦訳に誤りがあるとたいてい気づくが、専門外の書物は誤訳があってもそれとわからず仕舞いになって、世に誤解を蔓延させかねない。最後にそういう例をひとつ紹介しよう。

エピクロスの原子論の後史をフォローするうちに現代物理学の[・][・][・]さわりだけでも理解しなければならないはめになり、シュレーディンガーやハイゼンベルクが素人向けに著した書物の邦訳を貪るように読んだ。『精神と物質』(*Mind and*

Matter, 1958) はそのなかの一冊で、『生命とはなにか』(*What is Life?* 1944) や『自然とギリシア人』(*Nature and the Greeks*, 1954) などとともに晩年のシュレーディンガーが心血を注いだ科学啓蒙講演が基になっている。科学啓蒙家としても定評のあるシュレーディンガーの説明は門外漢にも実に興味ぶかく読めたのだが、つぎの文章にさしかかってはたと立ち止まってしまった。

私が見ますところ、「時間の統計的理論」は、相対性理論以上に時間の哲学と深い関係をもっております。相対性理論は革命的なものです、時間の非一方向性をあらかじめ仮定し、これには触れておりません。他方統計的な理論は、事象の順序〔という考え方〕によってそれを構築するのであります。これは、古代〔ギリシア〕のクロノス〔＝時〕という専制君主から自由になることを意味しております。私たちが心のなかで自ら築きあげたものは、精神に対する独裁的な力、すなわちそれを前に押し出したり、消し去ったりする力をもたないのだと私は思うのであります。けれども、あなたの方の幾人かはきっと、これを神秘主義と呼ぶでしょう。物理的な理論は常に相対的なものだという事実と、この理論はある基本的な仮定によっているという事実とを認めるとしても、物理的な理論は現在の状況において、時間を超えた精神の不滅を強く示唆している、と主張してよいように私には思われるのであります⁽²⁶⁾。

「時間の統計的理論」とは、物理系のエントロピーが増加する方向をもって「時間の矢」(アーサー・エディントン)とみなす統計熱力学の標準の見解のことである。それがシュレーディンガーの手にかかると、「時間の矢」が理論の産物ならその理論を操る精神自体は時間を超越した存在であるはずだと解釈される。この不滅の精神なるアイディアは、若き日にシュレーディンガーが愛読したショーペンハウアーの哲学に由来しており、『生命とはなにか』の「エピソード」にも登場するお馴染みのものである⁽²⁷⁾。量子力学のコペンハーゲン解釈にたいするもっとも仮借ない批判者は、神秘的な不滅の靈魂を理論物理学の中

‘Traduttore, traditore?’ (中金)

枢に引き入れて物理学を科学とは名ばかりのレリギオ宗教（ルクレティウス）にしてしまおうのだろうか。本書が「量子神秘主義」の流行に一役買ったことは事実であるが、いま問題にしたいのはそこではない。下線部の「非一方向性」は「一方向性」でなければ話が通じないのだ。

わたしの付け焼き刃の知識によれば、物理的世界は微視的スケールと巨視的スケールとで別々の法則に支配されている。個々の粒子の運動（軌跡）は、時間反転にたいして不変で完全に可逆的なニュートンの決定論的な運動方程式で記述することが理論的には可能だが、エントロピーの不可逆な増大は大量の微粒子集団の運動から帰結する統計的現象である。その発見に多大な貢献をしたのが、系の微視的状态の記述に確率計算を導入したマクスウェルやボルツマンらの気体分子運動論者であった。いくらシュレーディンガーが物理学界の異端児でも、ボルツマンに憧れてウィーン大学に入学したくらいだから、その学問的業績を根本から否定するようなことをいうはずはない。わたしは途方に暮れてしまった。

訳書が原著のどの版を底本としたのか明記されていないが、訳者の「解説」からおそらく初版であろうと見当をつけて該当箇所を探すと、たしかに the unidirectional flow of time とあるので誤訳ではないらしいとわかったが、かえて謎は深まった。そこでもしやと思い、シュレーディンガーの没後に『生命とはなにか』と合本で再版された同書をたしかめて、ようやく腑に落ちたのである。

To my view the “statistical theory” of time has an even stronger bearing on the philosophy of time than the theory of relativity. The latter, however revolutionary, leaves untouched the unidirectional flow of time, which it presupposes, while the statistical theory constructs it from the order of the events. This means a liberation from the tyranny of old Chronos. What we in our minds construct ourselves cannot, so I feel, directional power over our mind, neither the power of bringing it to the fore nor the power of annihilating it. But some of you, I am sure, will call this mysticism. So with all due acknowledgement to the fact that physical

theory is at all times relative, in that it depends on certain basic assumptions, we may, or so I believe, assert that physical theory in its present stage strongly suggests the indestructibility of Mind by Time⁽²⁸⁾.

要するに、正しくは *unidirectional* で「単一方向的な時間の流れ」となっていたのである。それが講演原稿を活字にするさいの校正過程で(たぶんシュレーディンガーは面倒臭がりて校正を他人まかせにしたのだ) 'i' の一字が脱落して *undirectional* になってしまい、再版時に編者か誰かが初版のミスプリントにようやく気づいて直したということらしい。これだけならよくある話だ。不思議なのは、理論物理学者にしてシュレーディンガー研究の第一人者ともあろう訳者が、「非一方向性」と読んでなんら不審に思わなかったことである。シュレーディンガーに心酔するあまり、天才科学者は常人のおよびもつかない発想をするものだと思っていて黙過したのだろうか。もしそうであったとしたら、権威への盲信が科学の進歩を損ねる——「ある著者の原文を引用するだけで、もっとも強力な論拠を破壊することができるほどだ⁽²⁹⁾」——というパスカルの警告は、今日なお傾聴にあたえると結論せざるをえない。むしろ最大の責任は初版で校正をおろそかにした原著者に帰せられる。だがそれならそれで、訳者が原著の誤りに気づいて正していたなら、訳書の価値を高めることになっていただろう。つくづく惜しいことをしたものだと思う。

おわりに

翻訳を論じる文章でいまでもよく引かれるイタリア語の古い格言に 'Traduttore, traditore' (翻訳者とは裏切り者なり) がある。翻訳とはある言語で表現されたものを別の言語で完璧に言い換えることだという前提に立つならば、それは絶対に不可能である以上、トラデットーレ 翻訳者はつねに裏切り者の謗りをまねがれなくなる。だがそれでは翻訳という困難な稼業にあえて乗りだす人間がいなくなってしまうではないか。少なくとも外国語に翻訳される作品の原著者自身

は、翻訳者にたいしてもっと寛容でさほどに過酷な要求はしないと思いたい。アナトール・フランス作品の英訳を多数手がけたJ・ルイス・メイが「翻訳は不可能事です」とこぼすと、作家は「そのとおりだ、わが友よ。その真実をみとめることがこのアートに成功するのに不可欠の前提なのだ」といって励ましたという⁽³⁰⁾。だからといって原著者の寛大さをはじめから当て込んで翻訳するなど、もちろん褒められた態度ではないだろう。西洋で翻訳といえばただちに聖書の各国語訳が想起され、翻訳論が言語論に直結する次第はすでに紹介したとおりである。その喧しい議論のなかで、神のこぼを人間が完全に理解することは不可能でも、なおそれを目指して神と対話しつづけるべきだと主張し、ヘブライ語の聖書をドイツ語訳で再現する工夫をみずから多数考案したフランク・ローゼンツヴァイクにわたしは共感を禁じえない⁽³¹⁾。

古典は将来も長きにわたってくりかえし参照されるだけに、それが翻訳者に負わせる責任の重さは、さして耐用年数の長くない現代の作品の比ではない。翻訳者は、ある言語でテキストを書いた原著者と別の言語でそれを読む読者とを媒介する通訳者である。だが優れた通訳者たらんとする翻訳者は、例外なくまずは原著者を相手に十分な対話をおこなっているものだ。テキストに疑問点や難読箇所がある場合、原著者が存命する現代の作品なら直接に問い質すこともできようが、古典はそういうわけにいかず、原著者になりかわって翻訳者が内なる想像上の対話によって決着をつけるしかない。だからこそ原著者は、自作を外国語に訳してくれる翻訳者を友人と呼ぶのである。それならば、読者も自分に読めない言語で書かれた書物を読めるようにしてくれる翻訳者を友人とみなして、誤訳のひとつやふたつは仮にあっても大目にみるべきではないだろうか。もちろん誤りをそのままにしておいてかまわないということではない。翻訳者自身ですら見落とした誤訳を発見して正すことができるのは、翻訳書の読者だけである。原著者と翻訳者の対話から生みおとされた翻訳テキストは、読者に供されて翻訳者の手を離れ、読者が個々に原著者とのあいだでかわす対話にゆだねられる。それが真剣なものであればあるほど、テキストをめぐる問答に支障をきたすような誤訳の発見につながるだろう。それは翻訳のあらさが

しというよりも友情の責務、異国のことばで書かれた書物を母国語で読めるようにしてくれた翻訳者に読者が報いるいわば恩返し行為であるがゆえに、翻訳者もそれを歓迎するはずだと考えたいのである。『歴史批評辞典』が日本語で読めるのはこのうえなく幸福なことなのだ。

一国の翻訳文化を豊かなものとするにはよい翻訳者がやはり必要である。だがそれをさらに豊かにするには、口やかましく詮索好きな読者の存在が欠かせない。少なくともわたしは本稿をそのような前提で書いている。

略号

DL. Diogenes Laertius, *Vitarum philosophorum*, Vol. I: Libri I-X, edidit Miroslav Marcovich (Stuttgart: B. G. Teubner, 1999).

DRN. *Titi Lucreti Cari, De rerum natura*, ed. Cyril Bailey, 3 Vols. (Oxford: Clarendon Press, 1947).

A. Pierre Gassendi, *Animadversiones in decimum librum Diogenis Laertii*, Reprint Originally published: Lugduni: G. Barbier, 1649 (New York: Garland, 1987).

OOV. Pierre Gassendi, *Opera omnia*, Faksimile-Neudruck der Ausgabe von Lyon 1658 in 6 Bänden mit einer Einleitung von Tullio Gregory, Bd.V (Stuttgart-Bad Cannstatt: Friedrich Fromman Verlag, 1964).

注

- (1) 小牧健夫訳『西東詩集』(岩波文庫, 1962年), 438-42頁参照。
- (2) 野村修編訳『暴力批判論 他十篇』(岩波文庫, 1994年), 71頁。
- (3) ジョージ・スタイナー, 亀山健吉訳『バベルの後に(上)——言葉と翻訳の諸相』(法政大学出版局, 1999年), およびダニエル・ヘラー = ローゼン, 関口涼子訳『エコリアス——言語の忘却について』(みすず書房, 2018年), 第21章参照。
- (4) Cf. Thucydides, *The Peloponnesian War: the Thomas Hobbes Translation*, 2 Vols, ed. David Grene, with an Introduction by Bertrand de Jouvenel (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1959). それでもホッブズのトゥキュディデス英訳が優れていることは多くの研究者がみとめている。柳沼重剛『トゥキュディデスの

‘Traduttore, traditore?’ (中金)

文体の研究』(岩波書店, 2000 年)を読めば, トウキュディデスのギリシア語の難解さは素人がけって手を出してはいけない域のものであることが了解される。

- (5) Cf. *The Prince and The Discourses*, with an introduction by Max Lerner (New York: Random House, 1950); *The Chief Works and Others*, translated by Allan Gilbert (Durham, North Carolina: Duke University Press, 1965); *The Discourses of Niccolò Machiavelli*, translated from the Italian, with an introd. and notes by Leslie J. Walker, with a new introduction and appendices by Cecil H. Clough, 2 Vols. (London and Boston: Routledge and Paul, 1975).
- (6) 大岩誠訳『ローマ史論(第一巻)』(岩波文庫, 1949 年), 16 頁。永井三明訳『ディスコルシ』(筑摩書房〈マキアヴェッリ全集2〉, 1999 年), 10 頁。
- (7) ただし男性名詞の *eventus* は主体が意図的に招来したものを, 中性名詞の *eventum* は意図せず結果したものをあらわす。
- (8) マキアヴェッリの^{フォルチュナ}運命は, 当時の占星術上の「自然的摂理」, すなわち必然性と, 「偶運・偶然」の両方を指示する語であった。村田怜『喜劇の誕生——マキアヴェッリの文芸諸作品と政治哲学』(風行社, 2016 年), 314-22 頁参照。
- (9) Cf. Niccolò Machiavelli, *The Prince*, trans. Harvey C. Mansfield (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1998), p.98 [池田廉訳『君主論』(筑摩書房〈マキアヴェッリ全集1〉, 1998 年), 81-82 頁参照]。
- (10) Cf. Niccolò Machiavelli, *Discourses on Livy*, trans. Harvey C. Mansfield and Nathan Tarcov (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1995), p.6.
- (11) Cf. Paul A. Rahe, “In the Shadow of Lucretius: The Epicurean Foundations of Machiavelli’s Political Thought,” *History of Political Thought*, Vol.28 No.1 (Spring 2007); Alison Brown, *The Return of Lucretius to Renaissance Florence* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2010), pp.68-69; Robert J. Roeklein, *Machiavelli and Epicureanism: An Investigation into the Origins of Early Modern Political Thought* (Lanham: Lexington Books, 2012), pp.8-9, 122-23.
- (12) 渡辺義雄訳『ベーコン随想集』(岩波文庫, 1983 年), 83 頁。
- (13) Francis Bacon, *Essays or Counsels Civil and Moral, The Works of Francis Bacon*, Vol. VI, collected and edited by James Spedding, Robert Leslie Ellis and Douglas Denon Heath (London: Longman and Co., 1861), pp.415-16.
- (14) Cf. François La Mothe le Vayer, “De la diversité des Religions,” *Cinq dialogues faits à l’imitation des anciens*, par Oratius Tubero (Amos: Paul de La Flèche, 1673), pp.386-87; Paul Henri Thiry, baron d’Holbach, *Systeme de la nature, ou Des lois du monde physique*

- et du monde moral*, Nouv. éd., avec des notes et des corrections, par Diderot, Édité avec une introduction par Yvon Belaval (Hildesheim: G. Olms, 1966), p.348〔高橋安光・鶴野陵訳『自然の体系(1)』(法政大学出版局, 2001年), 237-38頁〕。
- (15) Percy Bysshe Shelley, "The Necessity of Atheism," *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley, Vol.V: Prose*, eds. Roger Ingpen and Walter E. Peck (London: Ernest Benn, 1965), p.209〔阿部美春ほか訳『飛び立つ鷺——シェリー初期散文集』(南雲堂, 1994年), 21頁〕。
- (16) Cf. Percy Bysshe Shelley, "Queen Mab," *Selected Poetry, Prose and Letters*, ed. A. S. B. Glover (London: Nonesuch Press, 1951), p.95.
- (17) Pierre Bayle, *Pensées diverses sur la comète, Continuation des Pensées diverses sur la comète, Réponse aux questions d'un provincial, Œuvres diverses*, avec une introduction par Elisabeth Labrosse, t. III (Hildesheim and New York: Georg Olms, 1966), pp.110B-115B〔野沢協訳『彗星雑考』(法政大学出版局〈ピエール・ベール著作集第1巻〉, 1987年), 276-89頁〕; Voltaire, *Dictionnaire philosophique*, édition revue et corrigée, avec préface de Etienne Lebeau, texte établi par Raymond Naves, notes par Julien Benda (Paris: Garnier Frères, 1967), pp.40-43〔高橋安光訳『哲学辞典』(法政大学出版局, 1988年), 43-46頁〕; Julien Offray de La Mettrie, *Discours préliminaire, Œuvres philosophiques*, t.1 (Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1970), p.26.
- (18) Holbach, *op.cit.*, pp.343-45〔邦訳(1), 218頁〕。
- (19) Pierre Bayle, *Dictionnaire historique et critique*, nouvelle édition, augmentée de notes extraites de Chauffepié, Joly, La Monnoie, Leduchat, L.-J. Leclerc, Prosper Marchand, etc, t.IX (Genève: Slatkine Reprints, 1969), 532B-533A.
- (20) 野沢協訳『歴史批評辞典Ⅱ』(法政大学出版局〈ピエール・ベール著作集第4巻〉, 1984年), 620頁。出隆・岩崎允胤訳『エピクロス——教説と手紙』(岩波文庫, 1959年), 66頁。
- (21) Cf. Benjamin Farrington, *Head and Hand in Ancient Greece: Four Studies in the Social Relations of Thought* (London: Watts, 1947), pp.94-96。ウーゼナーは τοῖς ἀγαθοῖς をかっこに入れてガッサンディによる補足であることを明記している。*Epicurea*, hrsg. Hermann Usener (Leipzig: Teubner, 1887; Dubuque: Brown Reprint Library), S.6。ロングおよび最近年のマルコヴィッチも同様である。*Vitae Philosophorum*, Recognovit Breuique Adnotatione Critica Instruxit H. S. Long (Oxford: Clarendon Press, 1966), p.552; *Diogenis Laertii Vitarum philosophorum*, Vol. I: Libri I-X, edidit Miroslav Marcovich (Stuttgart: B. G. Teubner, 1999), S.792。ヒックスは反対にガッ

‘Traduttore, traditore?’ (中金)

サンディ説を採用している。Diogenes Laertius, *Lives of Eminent Philosophers*, Vol.2, trans. R. D. Hicks (London: Heinemann, 1950), p.650. ベイリーはウーゼナーにならっているが、ガッサンディの補足を必要とみなす。*Epicurus: The Extant Remains*, trans. and Notes by Cyril Bailey (Oxford: Clarendon Press, 1926), p.84 and 331. ディアーノはこれを省き、ガッサンディの補足を異説として紹介するにとどめる。*Epicuri Ethica*, ed. Carlo Diano (Florentiae: In Aedibus Sansonianis, 1946), p.7. ミュール, アリゲッティおよびロング = セドレーはガッサンディ説を無視する。*Epicuri epistulae tres et ratae sententiae e Laertio Diogene Servatae in usum scholarum, Accedit Gnomologium Epicureum vaticanum*, edidit Peter von der Muehl (Lipsiae In aedibus B. G. Teubneri, 1922), S.45; *Epicuro Opere*, introduzione, testo critico, traduzione e note di Graziano Arrighetti (Torino: Giulio Einaudi Editore, 1973), p.109; *The Hellenistic Philosophers*, Vol.1, eds. A. A. Long and D. N. Sedley (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), p.140.

- (22) 加来彰俊訳『ギリシア哲学者列伝(下)』(岩波文庫, 1994年), 300頁。ちなみに戸塚七郎訳(『世界人生論全集 1』筑摩書房, 1963年, 386頁), 真方敬道訳(『エピク로스書簡集』而化文庫, 1994年, 36-37頁)も同様である。
- (23) Friedrich Nietzsche, *Nachgelassene Fragmente*, Dezember 1881-Januar 1882.16[8], *Sämtliche Werke: Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*, hrsg. Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Bd.9 (München: Deutscher Taschenbuch Verlag; Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1980), S.660. 三島憲一訳『ニーチェ全集(第I期第12巻)』(白水社, 1981年), 299頁。
- (24) Cf. Bayle, *op.cit.*, VI, 184B-185A, note 108 [邦訳, 49頁および75頁の注120参照]。
- (25) Cf. *ibid.*, 186B-187A [邦訳, 51-52頁および76頁の注142参照]。
- (26) 中村量空訳『精神と物質——意識と科学的世界像をめぐる考察』(工作舎, 1987年), 132-33頁。
- (27) 岡小天・鎮目恭夫訳『生命とは何か——物理的にみた生細胞』(岩波文庫, 2008年), 171-81頁参照。
- (28) Erwin Schrödinger, *What is Life? The Physical Aspect of the Living Cell & Mind and Matter* (Cambridge: Cambridge University Press, 1967), pp.164-65.
- (29) Blaise Pascal, *Œuvres complètes*, t.II, Texte établi, présenté et annoté par Jean Mesnard (Paris: Desclée de Brouwer, 1970), p.777 [前田陽一・由木康訳『パスカル・パンセ II』(中公クラシックス, 2001年), 289頁]。この「真空論序言」(“Préface pour le traité du vide,” c.1651)は、いわゆる「トリチェリの真空」をアリストテレ

スの「真空嫌悪 (horror vacui)」説にもとづいて否認する風潮への批判である。

- (30) J. Lewis May, “Concerning Translation,” *Edinburgh Review*, No.245 (Jan. 1927), p.117.
- (31) 村岡晋一・田中直美編訳『新しい思考』(法政大学出版局, 2019 年), 第Ⅲ部参照。